様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　６月２１日現在

研究種目：　若手研究（スタートアップ）
研究期間：　2008～2009
課題番号：　20830032
研究課題名（和文）　教育実践に内在している評価理論の可視化
—「真正の評価」に向けた取り組みを事例に—
研究課題名（英文）　Visualization of assessment theories embedded in educational practice: The case for efforts toward authentic assessment

研究代表者
遠藤 貴広（ENDO Takahiro）
福井大学・教育地域科学部・講師
研究者番号：　70511541

研究成果の概要（和文）：
本研究では、まず「真正の評価（authentic assessment）」として位置づけられる取り組みが教育実践の中でどのような役割を果たしているのかを、米国エッセンシャル・スクール連盟加盟校の実践を事例に明らかにした上で、日本の学校現場で蓄積されている実践記録の叙述構造から、学校の実践に内在している評価の構造を読み解き、その評価構造が学校の実践研究のスタイルを規定している様相を、OECD-DeSeCo のコンピテンス概念等を手がかりに明らかにした。

研究成果の概要（英文）：
This study showed (1) the role of authentic assessment in educational practice of the schools affiliating with the Coalition of Essential Schools, USA, (2) the assessment structures embedded in school practice, taking cues from description structures of the records of educational practice stored in Japanese schools, and (3) how those assessment structures formed the styles of professional development in schools, utilizing OECD-DeSeCo's framework of competence.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,370,000	411,000	1,781,000
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,570,000	771,000	3,341,000

研究分野：　教育方法学
科研費の分科・細目：　教育学・教育学
キーワード：　実践記録、省察（reflection）、OECD-DeSeCo、専門職として学び合うコミュニティ（professional learning communities）、エッセンシャル・スクール連盟（Coalition of Essential Schools）、カリキュラム評価

１．研究開始当初の背景

教育実践には必ず何らかの評価行為が埋め込まれている。これなしに教育という意図的な営みは成り立ちえない。ただ、この評価という行為はしばしば無自覚に行われている。それでいながら、この無自覚な行為が教育実践を大きく規定している。その規定力はときに、明示的な教育理論のそれよりも大きい。教育評価理論として明文化されているものを超えて、実際の評価行為に大きな影響を与えている暗黙の「理論」が、教育実践に内在しているのである。

このように教育実践に内在的に機能し実践者の実際の評価行為を支配している理論を、本研究では評価の「使用理論（theories-in-use)」と呼んで、すでに教育理論として確立されているものから実践者が導き出し信奉している評価の理論（以下、評価の「信奉理論（espoused theories)」と呼ぶ）と区別する（この点は、Chris Argyris と Donald A. Schön による“theory-in-use”と“espoused theory”の区別を援用している)。

評価の「使用理論」は、実践者がそれに自覚的でない場合、「信奉理論」との間に齟齬があっても気づきにくく、それで実践に矛盾を来すことがある。一方で、元々の実践の方に優れた「使用理論」が内在していても、実践者がそれに自覚的でない場合、明文化された単純な「信奉理論」に絡め取られてしまうことがある。いずれにせよ、実践者が評価の「使用理論」に自覚的でない限り、優れた教育実践の持続は望みにくい。

そこで、評価の「使用理論」を可視化させ、公の検討の俎上に載せられるようにする必要がある。ただ、今はまだ評価の「使用理論」を可視化させること自体が難しい状態である。このような状況から、今後、教育実践の中で内在的に機能している評価の理論（評価の「使用理論」）を可視化させ、教育実践の事実から既存の評価理論を問い直すシステムを再構築することが急務となる。

２．研究の目的

本研究は、教育実践に内在している評価の理論を可視化させるシステムについて、「真正の評価」に向けた学校教育の実践的取り組みを事例に総合的に検討することを目的としている。

研究代表者はこれまで、米国における「真正の評価（authentic assessment)」論の成立過程を追いながら、そこで前提とされていた教育評価論・カリキュラム論・教育方法論・教育思想を原理的に考察する作業を進めてきた。「真正の評価」論とは、大人が現実世界で直面するような課題に取り組ませる中で評価することを志向するもので、特に 1980 年代後半以降の米国において、標準テストばかりに頼る姿勢を批判する中で登場した考え方である。

研究代表者は、グラント・ウィギンズ（Grant P. Wiggins）など「真正の評価」論提唱者の所論に即した検討を行ってきたが、他方で、「真正の評価」論確立に寄与した実践としてエッセンシャル・スクール連盟（Coalition of Essential Schools）加盟校の学校改革実践を事例にした研究も行っている。この中で研究代表者は、「真正の評価」に向けた学校の取り組みが、その学校に内在しているシステムを生徒のパフォーマンスの視点から可視化させる仕掛けにもなっていることを見出すに至った。

そこで本研究では、まず「真正の評価」に向けた実践的取り組みを事例に、そこにどのような評価の理論が埋め込まれているかを明らかにする中で、冒頭の目的達成を図りたい。

３．研究の方法

(1)　評価をうまく機能させている教育実践はすでに多く見られる。そこで第一の研究として、その実践事例を集め、各実践においてどのような評価活動が行われ、その背後にどのような理論が埋め込まれているのか、それはどうやって看破できるものなのか、事例検討を行う。

ここで事例とするのは、子どもの学びの事実を出発点に実践の改善を図るという方針を明確に打ち出し、その方針に対応した実際的な取り組みが行われている学校の実践である。例えば、先に紹介した米国エッセンシャル・スクール連盟の加盟校では、「真正の評価」の場として卒業審査時に「学習発表会」が行われ、そこでの生徒のパフォーマンスの実際から実践改善の手がかりを得るサイクルが確立している。そこには、生徒が学校で学んだ結果として実際何ができるようになったのかという事実を出発点に、学校関係者全員でその学校のシステム全体を検討していくという評価の理論が埋め込まれている。

このような学校の実践事例を、実践記録の分析と当該校でのフィールドワークを通し

て仔細に検討し続ける中で、教育実践に内在している評価理論を看破するための手法を各事例に即して蓄積・整理する。

(2)　第二の研究として検討の対象とするのは、学力調査の受け止め方である。日本では今、学力調査に敏感に反応する学校が多く、その調査における評価の枠組みが教育実践に大きな影響を与えている。研究代表者はすでに、OECD の PISA 調査など、大規模学力調査を分析した研究業績を有している。そこで、この成果を生かして、その学力調査で測定しようとしているもの、ならびに実際に測定しているものとは別に、学校現場はその調査をどのように受け止め、結果をどのように解釈しようとしているのか、その背後にどのような評価理論があると考えられるか、事例を蓄積する。この事例を整理・分析する中で、学校現場に内在している評価の「使用理論」の一端を明らかにするとともに、それを検証するための手法を蓄積する。

４．研究成果

(1)　まず、「真正の評価」に向けた取り組みの事例として、米国エッセンシャル・スクール連盟加盟校の実践に注目し、そこで「真正の評価」として位置づけられる取り組みが実践の中でどのような役割を果たしているのかを明らかにする中で、次のような知見を得ることができた。

「真正の評価」と呼ばれるものでも、それが学校改革の装置として有効に機能していたのは、実施される評価課題の状況が現実世界の文脈に近かったからというよりも、むしろ、その評価方法がその学校の教育実践に関わる人々をつなぎ、生徒の実際のパフォーマンスから学校の教育システムを分析することに寄与していたからである。学校改革にとっては、「真正の」課題で見られる生徒のパフォーマンスそのものよりも、むしろ、そこから学校の教育システムを分析し、それが学校の教育実践に関わる人々をつなぐ原理になっていたことが重要である。したがって、「真正の評価」による学校改革を考える場合、実施される評価課題の状況が現実世界の文脈に近いかどうかということを問う前に、まず、学校の教育システムを分析する装置として有効か、そして、学校内外での協働を促す装置となりえているかを問うことが重要である。

これらは、今後の日本の学校改革実践を考える上でも重要な論点となる。

(2)　次に、教育実践に内在している評価理論を検討するための素材として、本研究では実践者自身が書く実践記録に注目した。学校によっては、教師が実践記録を執筆する中で自分の実践を省察し、その実践記録を同僚教師と検討し書き直す中で新たな実践を展望するサイクルが校内研究として位置付いている。それはその学校におけるカリキュラム評価の重要な基盤となる。本研究では、実践記録の叙述構造から、学校の実践に内在している評価の構造を読み解き、その評価構造が学校の実践研究のスタイルを大きく規定している様相を明らかにした。

このとき大きな手がかりとなったのが OECD-DeSeCo のコンピテンス概念である。この新たな能力概念が、日本で蓄積されている教育実践研究の方法論を問い直す新視点となることが本研究の中で見いだされ、この視点での事例研究を重ねることも可能となった。

例えば、OECD-PISA の読解リテラシーを実現することを目指した「PISA 型読解力」に向けた取り組みは今や、国語以外の全教科で取り組まれ、「PISA 型読解力」に向けて教育課程全体を組み替えている学校現場も見られる。しかしながら、このような「PISA 型」を標榜する取り組みを詳細に分析してみると、実現しようとする能力の中身は PISA の「リテラシー」や DeSeCo の「キー・コンピテンシー」を意識したものになっていながら、そこで想定されている能力評価の枠組みは、「コンピテンスのホリスティックモデル」と呼ばれる DeSeCo 独特の能力概念と大きく異なっている場合がある。DeSeCo では、能力を、状況や文脈に依存する機能面から関係論的に捉えるアプローチが採られており、「○○力」という日本語でイメージされる、文脈独立的な実体として能力を捉えるアプローチとは一線を画している。一方で、「PISA 型」を全く標榜していないにもかかわらず、その実践研究の方法論に目を向けると、DeSeCo の能力概念と共通する枠組みを持った学校の実践研究も見られた。

このような状況を考えると、例えば「キー・コンピテンシー」の実現を目指した取り組みを見た場合、教育目標としてどのような能力の形成が目指されているのかということと同時に、それがどのような能力評価の枠組みの中で実践されているものなのかを問う必要が出てくる。この両方の視点がないと、育もうとする能力は新しいものでありながら、その取り組みを規定する枠組みは古いままで、実践に矛盾を来すことになるからである。

本研究では、福井大学教育地域科学部附属中学校の研究紀要等に蓄積された膨大な実践記録を手がかりに、実践者と長時間にわたる協働省察を繰り返すことによって、上の点での考察が可能となった。この研究方法論自

体も、今後の教育実践研究を考える上で重要な論点となる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

① 遠藤貴広「生徒の課題研究が教師の協働に果たす役割―米国ホジソン職業技術高校の卒業プロジェクトを事例に―」福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻（教職大学院）『教師教育研究』査読無、2010 年、251-261 頁
② 遠藤貴広「OECD の能力観を検討するために―『PISA 評価の枠組み』と『キー・コンピテンシー』から何を学ぶか―」福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻（教職大学院）『教師教育研究』査読無、2009 年、336-339 頁
③ 遠藤貴広「米国エッセンシャル・スクール連盟創設期の学校改革実践―創設期の教職大学院と拠点校の取り組みを考えるために―」福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻（教職大学院）『教師教育研究』査読無、2009 年、321-335 頁
④ 福井大学教育地域科学部「教育実践研究Ａ」研究会（遠藤貴広・中村保和・八田幸恵・廣澤愛子・松木健一・柳沢昌一）「教員養成初年時における課題探究型授業の展開―福井大学教育地域科学部『教育実践研究』に関する協働研究（１）―」福井大学教育地域科学部附属教育実践総合センター紀要『福井大学教育実践研究』査読有、第 33 号、2008 年、11-22 頁
http://repo.flib.u-fukui.ac.jp/dspace//handle/10098/1940
⑤ 遠藤貴広「米国エッセンシャル・スクール連盟の学校改革における『真正の評価』の役割―ホジソン職業技術高校の卒業プロジェクトを事例に―」『福井大学教育地域科学部紀要 第Ⅳ部 教育科学』査読有、第 64 巻、2008 年、1-12 頁
http://repo.flib.u-fukui.ac.jp/dspace//handle/10098/1889

〔図書〕（計６件）

① 遠藤貴広「探究する授業の勘所」「協働探究を支える省察の構造―実践の背後にある能力観・評価観―」福井大学教育地域科学部附属中学校研究会『学び合う学校文化（学びを拓く《探究するコミュニティ》第１巻）』エクシート、2010 年、157-160, 193-205 頁
② 遠藤貴広「標準テスト批判の諸相―『真正の評価』の理論と実態―」北野秋男編『現代アメリカの教育アセスメント行政の展開―マサチューセッツ州（MCAS テスト）を中心に―』東信堂、2009 年、287-304 頁
③ 遠藤貴広「大津和子と国際理解教育―人間の尊重と科学的探究の精神―」田中耕治編『時代を拓いた教師たち〈２〉―実践から教育を問い直す―』日本標準、2009 年、63-74 頁
④ 遠藤貴広「学力の評価」「指導要録・通知表」「中国のカリキュラム」田中耕治編『よくわかる教育課程（やわらかアカデミズム・〈わかる〉シリーズ）』ミネルヴァ書房、2009 年、96-99, 202-203 頁
⑤ 遠藤貴広「序」福井大学教育地域科学部附属中学校研究会『授業のプロセスとデザイン　数学・理科・技術編（学びを拓く《探究するコミュニティ》第３巻）』エクシート、2009 年、i-vii 頁
⑥ 遠藤貴広「探究する文化を育むもの」「カリキュラムの謎を読み解く」「探究の展開を支える知性」「学びを拓く哲学」福井大学教育地域科学部附属中学校研究会『授業のプロセスとデザイン　国語・音楽・美術・英語編（学びを拓く《探究するコミュニティ》第２巻）』エクシート、2009 年、3, 72-76, 141, 190-192 頁

６．研究組織
(1)研究代表者
遠藤 貴広（ENDO Takahiro）
福井大学・教育地域科学部・講師
研究者番号：　70511541